広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ハワイの歴史がつくられたとき ： ハワイの過去・現在・未来をめぐる霊的・知的戦い
Author(s)	山本, 貴裕
Citation	史学研究 , 311 : 1 - 28
Issue Date	2022-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055720
Right	
Relation	

ハワイの歴史がつくられたとき
―ハワイの過去・現在・未来をめぐる霊的・知的戦い―

山 本　貴 裕

はじめに

1893年１月、ハワイ王国はアメリカ人宣教師の子孫らによって転覆させられ、一世紀にも満たない短い歴史を閉じた。この事件はよく知られているが、その１年前に同じ宣教師の子孫らによって「ハワイ歴史協会（Hawaii Historical Society）」が設立されていたという事実はほとんど知られていない。実は、ハワイ王国転覆の前後は、宣教師の子孫によってハワイ王国史の記述が盛んにおこなわれた時期でもあった。ハワイ歴史協会の設立はこうした文脈のなかに位置づけることができる。

この時に書かれた歴史はその後、約１世紀にわたって、ハワイ王国の「正史」として、支配者の白人にとってはもちろん、被支配者のハワイアンによっても受容・継承されていく。この種の歴史理解の典型は、ベル・ブレイン著『ハワイの変革――アメリカ人宣教師がいかにして某キリスト教国を世界に与えたか』（原題は註に示す。以下同様。）にみることができる。この著は、1898年７月７日にマッキンレー大統領が合衆国上下院を通過したハワイ併合決議に署名した、そのわずか２ヶ月後にアメリカ本土の出版社から出版されたものである。その序文には、若者たちに「ある堕落した野蛮な人種が、いかにして知的で神を畏れるキリスト教国の国民となったか」を学んでほしいとの著者の思いが書かれている。また第１章の冒頭には「ハワイ諸島は［中略］購入や征服によってではなく、それを私たちに贈り物として差し出したハワイの人びとの投票によって、私たちの領土に加えられた」とある(1)。

だが、ハワイアンが自らの文化や国土の喪失を受動的に受け入れたという歴史解釈は、1990年代以降、ハワイアンの血を引く歴史家による、ハワイ語で書かれた史料の発掘によって挑戦を受けることになる。なかでもノエノエ・シルヴァ（Noenoe Silva）が博士論文執筆の過程で発見したハワイアン３団体による「反併合請願」は、ハワイ史の理解の仕方に大きな転換をもたらした。この請願は、ハワイがアメリカ合衆国に併合される前年の1897年に、当時のハワイアン人口の90％以上によって署名され、アメリカ議会に提出されたものであった。シルヴァはこの博士論文で、ハワイの植民地化を推し進める白人に対するハワイアンの抵抗運動を描き出し、それ

まで支配者によって隠ぺいされていたハワイ史の側面に光を当てた[2]。

こうしたハワイ史理解の修正は、そのほかにも、首長の系図に根ざす伝統的なハワイアンの世界観・歴史観に光を当てたリリカラー・カメエレイヒワ（Lilikalā Kame‘eleihiwa）、歴史家と宣教師の共通点を指摘し、「一方［宣教師］が魂を植民地化したなら、他方［歴史家］は頭脳を植民地化した」と批判したハウナニ＝ケイ・トラスク（Haunani-Kay Trask）など、ハワイアンの女性の歴史家・活動家たちによって積極的に推進されてきた[3]。また、こうした新しいハワイ史の解釈は、白人で男性の歴史家、トム・コフラン（Tom Coffman）らによっても広められてきた[4]。

このように20世紀末以降、被支配者の側に立ったハワイ史の理解の仕方が正当性を獲得してきたが、1893年のハワイ王国転覆や1898年のハワイ併合の過程において、その後のハワイを支配することになる者たちによってハワイ史の記述が盛んにおこなわれていたという事実や、そのことが当時の政治的文脈においてどのような意味を持っていたかという問題については、これまでほとんど検討されることがなかった。おそらく唯一の例外と言ってもよいのが、ハワイ歴史協会設立100周年を記念して1992年に当時の協会会長ドナルド・ジョンソンによって書かれた「覚書」[5]である。ジョンソンはこの「覚書」においてハワイ歴史協会の100年の歴史を振り返り、そのなかで協会創設者とハワイ王国を転覆させた宣教師の子孫との密接な関係について触れている。だが、この「覚書」が同協会の100周年を記念して書かれたという制約もあってか、彼は両者の関係について踏み込んだ考察は行っていない。

本稿ではハワイ歴史協会設立前後の数年間、すなわち1880年代末から1890年代初めにかけてアメリカ人宣教師の子孫らによって主導されたハワイ史記述の試みのいくつかの具体例を取り上げ、そこにみられる歴史記述行為とハワイ征服との密接な関係を、とくに彼らの行動を導いた「福音派（evangelical）」の歴史観に注目しつつ考察してみたい。ここでの考察において使用する史料は、ハワイ歴史協会が発行した報告集、ハワイの世俗新聞および宗教新聞の記事である。

なお、本稿は以下のように構成する。まず第一章でハワイ歴史協会設立以前の1880年代のハワイ王国において宣教師の子孫とカラーカウアのあいだで繰り広げられた歴史記述をめぐる論争を概観する。第二章では1892年１月のハワイ歴史協会設立から翌年１月のハワイ王国転覆にかけて宣教師の子孫によって広められた歴史をめぐる言説とその政治的含意を考察する。第三章ではハワイ王国転覆後の米布の併合運動における「歴史家」の役割を分析してみたい。

第一章　1880年代のハワイ王国における歴史記述をめぐる論争

1892年１月のハワイ歴史協会設立の背景にはハワイ王国における歴史記述をめぐる論争があった。1880年代のハワイ王国では、1820年以降ハワイに到着したアメリ

カ人宣教師たちの築いてきたキリスト教文明を守ろうとする宣教師の子孫たちと、キリスト教導入以前のハワイ伝統文化のリバイバルを推進するカラーカウア国王（在位1874年～1891年）が対立を深めていた。1887年、両者の対立は前者が武力による威嚇を用いて後者に国王の権力を大幅に削ぐ新憲法――いわゆる「銃剣憲法（Bayonette Constitution）」――を押しつけるという事態にまで発展した。両者の対立はハワイの支配権をめぐる宗教・政治的戦いであった[(6)]。そしてそれは、ハワイの「歴史記述」をめぐる争いでもあったことに留意せねばならない。

宣教師の子孫たちは19世紀ハワイ史全体をキリスト教がもたらした「進歩」としてとらえる一方で、1860年代以降のハワイ伝統文化のリバイバルを、やがて訪れるキリストの最終的勝利の前の「一時的な退歩」として位置づけた。この種の歴史観は、彼らの月刊新聞『フレンド』の1888年７月号に掲載された社説にその典型をみることができる。当社説は冒頭で「過去２～３年」ハワイアンのあいだでの「さまざまな形式の古い異教（pagan）崇拝のリバイバル」が深刻な問題となってきたと指摘し、その端緒を、カメハメハ五世（在位1863年～1872年）が弟のカメハメハ四世（在位1855年～1863年）のもとで内務大臣の地位についていたころに求めた。

社説によれば、1861年ごろ、のちのカメハメハ五世が300人以上の先住民の「呪術医（medicine-men）」――ハワイ語で「カフナ」と呼ばれた――に、先住民の薬草や外国の薬を用いる医療行為を許可するライセンスを与えた。彼らはその後、若者に「ほとんど忘れられていたアウマクア［祖先神・守護神］に関する伝承」を伝え、「相当数の呪物（fetishes）や偶像（idols）」をとくに「下品で不潔なフラフラ」のために「密かに設置し」、「古い異教」を積極的に広めてきた。1861年以降と比して、それ以前の一世代は「1838年から1839年にかけての巨大な霊的引き上げ」――当時の宣教師やその子孫らはこの出来事をアメリカ本土での同様の現象になぞらえて「リバイバル」と呼んだ――の影響からキリスト教優位の時代であった。この間、「異教の慣行」は「潜伏状態」にあったが、1861年以降、それは復活･成長し、1880年以降は「高位の者たちのあいだで」その傾向を助長するような「組織的な企て」がなされてきた。社説はこのようにハワイ史の流れを振り返ったうえで、過去２年間におけるこうした「企て」の具体例として、1886年の「腐敗議会」が「ハワイ衛生局（Hawaiian Board of Health）」――宣教師の子孫はそれを「異教魔術委員会（Board of heathen sorcery）」と呼んだ――を組織化したこと、またそれと関連して秘密結社「ハレナウア協会（Hale-nau-a Society）」が設立されたことを挙げている。

社説はこうした最近の「異教」のリバイバルがハワイアンのキリスト教徒としての生活に「深刻な被害」を及ぼしかねないと危惧しつつも、「非常に力強く希望に満ちた善の要素」も存在し、それが最終的に勝利するのは確実であると指摘し、自分たちはその実現に向けて努力しなければならない、と読者に呼びかけた。「いまこそハワイアン教会のいのちが、昔からの遺伝性の闇の力（Power of Darkness）が

有する奇妙な魅力に屈してしまわぬよう、そのいのちを保持または維持するための賢明で真摯な方策を取るべきである。この国民はかつてその闇の力から解放されたのだから」。社説はこのように締めくくった[7]。

ここには宣教師の子孫たちの「後千年王国説的（postmillennial）」な歴史観をみることができる。後千年王国説とは、キリストの再臨を千年王国設立の「後」に位置づける終末論である。キリストの再臨が千年王国設立の「後」ということは、千年王国建設の過程における主役は人間であり、キリストではない。つまり、この終末論によると、千年王国は人間の改革努力の積み重ねによって築かれることになっており、それは、この世はだんだんよくなっているという楽観論にもつながった。ただし、この種の楽観論も、聖書の預言によれば終わりのときに起こるとされる、キリストと反キリストとの最終戦争、すなわち「ハルマゲドン」を否定するものではない。「ハルマゲドン」はそれまでの人類史における「進歩」の延長線上に位置づけられるべきことであった[8]。

このような後千年王国的終末論の伝統を米福音派の父祖から受け継いだハワイ王国の宣教師の子孫たちは、この終末論にもとづく歴史観をハワイ史の解釈に援用し、自分たちが神の計画のなかでおかれている位置を理解した。すなわち、かつては「異教」の「闇」に支配されていたハワイアンは19世紀中葉に起きた「リバイバル」によってその「闇」から解放されたが、今度はその「闇」の力が逆に「リバイバル」を起こし、彼らを「異教」の習慣に引き戻そうとしている。だが、キリストの最終的勝利は必ずやってくるのであり、自分たちは「異教」に引き戻されつつあるハワイアン教会のいのちを守らねばならない、と。彼らの歴史観においては、カラーカウアが1880年以降、積極的に推進していたハワイアン伝統文化の「リバイバル」は、より大きな「進歩」の文脈における「一時的な退歩」として片づけられた。

上に挙げた社説以外にも、この時期の『フレンド』には「サタンが解き放たれ、過去60年にわたるキリスト教の訓練と引き上げ効果を覆そうと躍起になっているようだ」[9]、「その日［最終的勝利の日］はいまの時代、この世界においてやってくるのであり、その日の到来は加速しつつある」[10]、「私たちはこの前兆に満ちた偉大な19世紀における最後の10年間に入ろうとしている」[11]、「神は北太平洋の中心に位置するこの国のために偉大な運命を用意されている」[12]など、宣教師の子孫たちの後千年王国説的歴史観を示す表現が散見される。

このような言論が繰り広げられていたとき、カラーカウア国王は宣教師の子孫らのこうした歴史観に対抗する動きを組織化していた。1778年のクック船長によるハワイ諸島「発見」がもたらした、西洋との接触「以前」にさかのぼる神話的歴史観を体系化し広めようとしたのである。ハワイアンの歴史観は神々から首長へとつながる系譜を重視した。リリカラー・カメエレイヒワによれば、「系図こそがハワイアンにとっての時間概念そのものであった。そしてそれが私たちの周りの空間に秩

序を与えた。ハワイアンの系図は私たち国民の歴史（histories）である」[13]。

その系図の作成にもっとも貢献したのが、カラーカウアであった。彼はまず1880年に「ハワイアン首長系図委員会（Papa Kūʻauhau o Nā Aliʻi Hawaiʻi; Board of genealogy of Hawaiian chiefs）」を立ち上げ、1884年には同委員会の報告書を出版した。この報告書には128の「メレ」（唄・祈り・詩）が含まれており、その最初のものは「クムリポ」と呼ばれた。「クムリポ」とは「深い闇の源」を意味し、それは地上の生きとし生けるものの起源を描き、それらを「ロノイカマカヒキ」という首長の系図に、さらにはその子孫とされるカラーカウアに結びつけるものであった。

「クムリポ」には二つの政治的意味があった。一つは、カメハメハの血筋ではないカラーカウアの王権の正当性を補強しようとする意図である。いま一つは、帝国主義により抑圧された先住民の過去を取り戻そうとする意図、すなわち白人の支配に対するイデオロギー的抵抗としての意図であった。後者に関してノエノエ・シルバは次のように説明する。「クムリポ」はそれまでの歴史を７つの「闇（pō）」の時代と９つの「光（ao）」の時代に分け、「闇」の時代を最初の人間が出現する前の「神々」の時代とし、「光」の時代を宣教師到来の数千年前からはじまる「人間」の時代とした。そうすることで、西洋文明との接触以前を「闇」の「野蛮」な時代とし、それ以降を「光」に満ちた「文明」の時代とする、西洋中心の歴史観に挑戦したのである[14]。

「クムリポ」を含む系図委員会報告書の出版に加えて、カラーカウアはさらに1886年、首長を会員とする系図研究のための秘密結社「ハレナウア」を設立した。それは、宣教師の子孫らから「野蛮」な過去を復活させようとしていると非難されることとなった。だが、系図委員会にしてもハレナウアにしてもそこで得られた知識は、首長階級の少数のエリートにしか影響を与えることができなかった。そこでカラーカウアは自らの戴冠式（1883年）および生誕50周年記念行事（1886年）において、メレとフラ（踊り）を通して、これらの団体によって得られた系図に関する知識を一般のハワイアンのあいだに広めるという方策をとった[15]。

このように1880年代のハワイ王国では、宣教師の子孫とカラーカウア国王とのあいだで歴史記述をめぐる闘争が繰り広げられていた。一方では、宣教師の子孫が1860年代以降のハワイアンのあいだでの「異教」の「リバイバル」を、より大きな「キリスト教」の「進歩」の文脈における「一時的な退歩」として片づけることで、自らの政治的支配を強化しようとした。他方では、カラーカウアが首長の系図にもとづくハワイアンの伝統的歴史観をあらゆる階級のハワイアンのあいだに広めることで、ハワイアンにハワイアンとしての誇りやアイデンティティを取り戻し、宣教師の子孫らによる支配に抗するよう促した。

カラーカウアのこうした試みに危機感を覚えた宣教師の子孫らは反転攻勢に出る。まず彼らは1887年の前半、それまで分散していた自分たちの教会の統廃合を行

い、勢力の集中化を図る。またその間４月には、前年末に行われたカラーカウア生誕50周年記念式典に対抗するかのように、「彼ら自身の」50周年記念式典も挙行した。それは、アメリカンボード（正式名称は American Board of Commissioners for Foreign Missions）から繰り返し派遣された宣教団のなかで最大規模のものとなった、1837年の「補強部隊」のハワイ到着に着目し、その50周年を祝うことで、1887年「現在」における自分たちの勢力を「補強」することを意図したかのような祭典であった[16]。さらに、宣教師の子孫たちはこの間、密かにクーデターの準備を推し進め、６月末から７月初めにかけてそれを実行に移し、カラーカウアに銃剣憲法を押し付けた[17]。

重視すべきは、このクーデターの後も宣教師の子孫とハワイアンの政治闘争が終息しなかったことである。1887年の銃剣憲法後、ハワイの政治は一時的に「宣教師派（missionary party）」――「改革党（Reform Party）」のもとに集結――の独占状態となるが、1890年２月の選挙では、同派の支配に不満を持つハワイアンと白人の連合勢力――「国民改革党」のもとに集結――が巻き返しを図り、宣教師派は劣勢に立たされた。２年後の1892年２月の選挙では「反」宣教師派勢力のなかから「リベラル党」（共和政のもとでの先住民による政治支配の実現を訴える）が出現し、ハワイの政治状況は混迷を極めることになる[18]。ハワイ歴史協会が設立されたのはこのような状況下でのことであった。

第二章　ハワイ歴史協会発足からハワイ王国転覆までの宣教師派による歴史記述

ハワイ歴史協会設立の話が最初に持ち上がったのは、1891年12月29日、「ハワイ福音協会（Hawaiian Evangelical Association）」の役員会議室でのことであった[19]。ハワイ福音協会とは、1820年から1848年にかけてハワイ諸島にやってきたアメリカンボードの宣教師たちによって設立された諸々の教会が、1854年に同ボードから独立結成した団体のことである[20]。ハワイ宣教師の子孫の多くは同協会と密接にかかわっていた。この章では、ハワイ歴史協会発足から、その１年後のハワイ王国転覆にかけて、宣教師の子孫らによって行われた歴史記述の試みと、その政治性、とりわけハワイ王国転覆との関係性について考察してみたい。

ハワイ福音協会の役員会議室での会合から約２週間後の1892年１月11日、ホノルル図書館閲覧室協会においてハワイ歴史協会設立会議が開催された。設立会議参加者21名のうち２名――日本人牧師のジロー・オカベと著名なハワイアンの民族自決主義者、F・J・テスタ――を除けば、ほぼ全員が白人エリート階級に属していた。彼らの多くは、1893年にハワイの君主制を転覆させ、その翌年にハワイ共和国を設立し、1898年にそのハワイ共和国を今度は合衆国に併合する一派、すなわち宣教師

派と関係が深かった[21]。

１月28日の会合では宣教師の息子、W・D・アレクサンダー（W. D. Alexander）博士が同協会初の報告となる「ハワイ諸島とスペイン領アメリカとのかつての関係」を読み上げた[22]。この報告は翌月の『フレンド』で第一面から第四面までを割いて全文掲載された[23]。アレクサンダーはこの報告で、16世紀以来、カトリック国スペインがハワイ諸島に対して及ぼしてきた影響をまとめることで、その影響を最小化しようとした。

アレクサンダー報告はまず、太平洋全体が「発見した者の権利」と「ローマ教皇アレクサンデル六世の勅書の権利」の双方によって「スペインに属していた」と認める。報告によれば、1513年にスペイン人のバルボアがダリエン地峡（パナマ東端部にある地峡）の山の頂から太平洋を見たのち、それをカトリックのスペイン国王のものであると宣言した。その７年後にスペイン国王に仕えるポルトガル人、マジェランが彼自身にちなんで名づけられた海峡を通り、太平洋を横断し、ラドロン諸島（マリアナ諸島の旧称）とフィリピン諸島を発見した。また、1493年にローマ教皇アレクサンデル六世が子午線の西側すべての支配権をスペインに与えた[24]。

アレクサンダー報告は冒頭でこれら「二重の資格」によってカトリックの国、スペインが太平洋全体を所有していたと認める一方で、同国がハワイ諸島に与えた影響については最小限の評価しか与えなかった。たとえば1500年ごろハワイ島の南コナに位置するケエイに漂着したスペイン人船長とその姉（または妹）は、その後ハワイアンと結婚し、名高い首長の家系の先祖となったが、「古代ハワイの工芸・宗教・言語へのスペインの影響の痕跡はみられない」。また、1743年に英軍艦センチュリオンがマニラに向かう途中、フィリピン諸島付近でスペイン船を拿捕した際に発見された手書きの海図には、ハワイ諸島と同じ緯度（ただし経度は約17度東にずれる）に群島が描かれ、そのうちの最南・最大の島は「ラ・メサ」――英語の “the table” に当たり、ハワイ島の “high table land” を指すものとされた――と命名されていたが、この海図はクック船長によるハワイ諸島発見とは「無関係だと思われる」。なぜなら、クックはボラボラ島を出発したのち真北方向のアラスカを目指しており、その途中で「オアフ島を初めてみて驚いた」のであるから、とアレクサンダーは指摘した[25]。

さらに彼は、ハワイ諸島でのスペインの影響の「痕跡」をアメリカ「大陸の反対側に位置する某ピューリタンの町［ボストンを指していると考えられる］から発する影響と比して、微小かつ表面的」と断定した。そのうえで、前者の例として次のようなものを挙げる。カリフォルニアからもたらされた最初の牛や馬、サン・ブラスからもたらされた蚊、オレンジ・イチジク・ぶどう・バラ・バター・塩漬けの牛肉・ワイン・生垣用のウチワサボテンをハワイにもたらしたドン・フランシスコ・パウラ・イ・マリン（別名マニニ）、ハワイに次々に到着した海賊たち、パニオロ（大

牧場）を経営するためにカリフォルニアやメキシコから呼び寄せられたヴァケロ（カウボーイ）、スペイン式の鞍・鐙・拍車、ソンブレロ（広縁帽子）、メキシコのポンチョ、アドーベれんが、つい最近までハワイ唯一の通貨であったスペイン金銀硬貨――。アレクサンダーはこのようにスペイン領アメリカがハワイ諸島に与えた「微小かつ表面的」な影響を列挙したのち、報告の最後で、1848年のアメリカ合衆国によるカリフォルニアの併合と、翌1849年の金発見に言及した。そのうえで米国の太平洋岸への進出という新しい出来事が「ハワイ諸島の歴史における新時代の到来を告げ、かつてスペインが残した影響の痕跡をほぼ消し去ることになる一連の変化を始動させたのである」と締めくくったのである[26]。

このようにアレクサンダー報告では16世紀以来、カトリック国スペインおよびスペイン領アメリカがハワイ諸島に及ぼしてきたさまざまな影響が取り上げられ、認知される一方で、それらがハワイ史に与えてきた長期的影響力は否定された。後者を否定するにあたってとくに重要な役割を与えられたのが、19世紀中葉のアメリカ本土での出来事であった。アレクサンダー報告の６年後の1898年に合衆国とスペインのあいだで勃発した米西戦争を契機にハワイ諸島はついに合衆国に併合されることとなるが、アレクサンダーは、その前にハワイ宣教師派がハワイ諸島を完全に自らのものとすべく、カトリックの勢力圏にあるスペインが当地において有していた影響を最小化しようとしていたかのようである。

宣教師派にはそれ以外にも、いやそれ以上に封じなければならない過去からの影響があった。それは彼らが「異教」と呼んだ、ハワイ先住民の伝統であった。同年４月７日に開かれたハワイ歴史協会の会合で同協会副会長のＪ・Ｓ・エマソンが約２か月前のアレクサンダー報告に続いて行った報告、「卑近なハワイの神々」は、まさにそうした意図を持っていた[27]。

この報告の冒頭でエマソンはハワイにおける「異教」の廃止とその「リバイバル」を次のように振り返る。カメハメハ一世（在位1795年～1819年）の死から間もない1819年12月末に戦われたクアモオの戦い――古いタブーを破ろうとするカメハメハ一世の子息、リホリホの率いる軍勢と、それを守ろうとするカメハメハ一世の弟、ケクアオカラニの率いる軍勢が戦い、前者が勝利した――の結果、ハワイの「国教」としての「異教」が廃止された。その後、カメハメハ一世の妻の一人、「カアフマヌの強力なリーダーシップのもとで偶像の多くが破壊され、瞬く間にキリスト教が国教となった」。しかし、ハワイアンの「古い信念は彼らの生活に強力な影響を及ぼし続け」、それは時折表面化してきた。「その傾向はカメハメハ五世の治世がはじまった1863年からカラーカウアが没した1890年末［正しくは1891年初め］までとくに顕著であった」[28]。1860年代以降を「退歩」としてとらえるエマソンのこうした歴史理解は前章でみた『フレンド』社説のそれと共通しており、宣教師の子孫たちのあいだでの共通理解であったことがうかがえる。

エマソンはこのようにハワイ史を大まかに振り返ったうえで、ハワイアンのあいだに残る「卑近な」神々、とくに「ウニヒピリ」と「アウマクア」への信仰の実態の描写に入る。エマソンは、カフナが召喚する卑近な霊のなかでもっとも恐ろしいのがウニヒピリだとしたうえで、その召喚の手順を次のように説明する。子どもや親せきや親友などが亡くなると、その体を「カフ」（守をする人）の住居に隠す。カフは死者の肉をそぎ落とし、骨と髪の毛を束ね、定められた供物とともに死者の霊に手向ける。カフは食事のたびに定められた祈りを捧げ、それは一生続く（カフの死後はその息子が後を継ぐ）。死者の霊は次第に力を増し、それへの見返りとしてカフは超自然的な力を手に入れる。カフはさらに死体の残部を分割し、その断片のしかるべき処理を通して自らの「眷属（agents）」――「キノ・マカニ」（風の体）とサメと「モオ」（トカゲ）――を手に入れ、それらを用いて「生贄を追いかけ、苦しめ、殺す」。カフ自身も正しい方法でのウニヒピリの守を怠ると祟りを受け、彼やその家族は破滅する[29]。

エマソンはウニヒピリの説明ののちアウマクアの説明に移る。ここでエマソンは、アウマクアの種類は多いが、ハワイアンの「知的・霊的捕囚」――本稿の副題はこの表現を借用している――を理解するためにはその「慎重な検討」が必要であるとし、ウニヒピリとアウマクアの違いから説明をはじめる。彼によれば、ウニヒピリが「一人のカフナによってつくられ、そのカフナの奴隷となる」のに対して、アウマクアは「祖先神」であり、通常は「部族または階級」単位で親密な関係を結ぶ[30]。

続いてエマソンはさまざまな種類のアウマクアについての説明に入る[31]のだが、ここでは「アウマクアのなかでもっとも広く信じられていると思われる」サメのアウマクアの一例を取り上げてみよう。エマソンによれば、サメのアウマクアとカフの関係は親密で、前者は後者を危険から守ってくれる存在である。そのことをよく示す例として、エマソンはカルアヒネヌイという名のカフの話に言及する。カルアヒネヌイはハワイ島とマウイ島のあいだのアレヌイハハ海峡を航海していた際に嵐に合った。彼女の乗っていたスクーナーは転覆し、彼女は他の船員たちとともに海に投げ出された。だが絶体絶命の彼女が自分のサメの神「カモホアリイ」の助けを求めると、カモホアリイはすぐに助けに来て、彼女を背中に乗せ、カホオラヴェ島に連れて行ってくれた。

この話の直後にエマソンはアレクサンダーの『略史』を持ち出し、そこには「この事件についての真実」が「サメによる救助」への言及なしに述べられているとし、「1840年５月10日日曜日正午」に起きた事件に関する『略史』の記述を引用する。それによれば、この日、ケオラ号という名のスクーナーがハワイ島のコハラ岬沖で浸水水没し、乗客と乗組員は強い北向きの海流に乗って約30マイル先のカホオラヴェ島に向かって泳ぐことになった。そのなかにラハイナ島のマウアエとその妻カルアヒネヌイがいた。二人はそれぞれ空のバケツにつかまりながら一緒に泳いだが、

月曜の午後、夫の方が力尽きた。妻は夫の両腕を自分の首にかけ、片方の手でそれをつかみ、もう一方の手で泳いだ。そのうち夫は亡くなり、妻は生き残るために夫を手放さなければならなかった。日没後、妻は海岸にたどり着き、漁師に発見・救助された。これが、サメのアウマクアに関する「人びとの信仰」の背後にある「事実」である。エマソンはこう指摘した[32]。つまりエマソンは、サメのアウマクアに対するハワイアンの「信仰」を、それに関連した歴史的「事実」と対比することで、前者の「迷信ぶり」を浮き彫りにしようとしたのである。

エマソンはそのほかにも多種多様なアウマクアを次から次へと紹介したのち、「教育を受けていない国民には、奇妙で尋常ならざるものはすべて神なのである」との見解を述べる。そして、「無知な大衆」が「神の宿る物体」を神そのものと混同し、先祖崇拝が「非常に不快で下品なかたちの呪物崇拝」に堕していると批判する。ここには本稿第一章でみた、『フレンド』紙上での「呪物」崇拝批判との連続性をみることができる。

エマソンは報告の最後でハワイアンのあいだに色濃く残る多神教的信仰とキリスト教の一神教的信仰を対比させ、次のように述べる。

> 神は一つであるという事実［中略］をハワイアンにはっきりと植えつけるべきである。カフナたちによれば、ハワイアン人種の衰退は、海の彼方から一冊の本（聖書）に乗ってやって来た［中略］白人の神によって取って代わられることを恐れ憤る、ハワイ古来の神々の復讐の結果である、とされている。また、この国に到着したときには虚弱な余所者に過ぎなかった、この外国の神が人びとの崇拝（ホオマナマナ）によって次第に力を増し、ハワイ万神殿の均衡を破壊した、と彼らは信じている。ここ数年、異教のリバイバルやキリスト教への反乱が勢いづいているが、その原因はここにある。

エマソンのこの結論部分は、彼のなかでの歴史記述（知性）と宗教的信念（魂）の一体性を示していて興味深い[33]。

ハワイ歴史協会でのエマソン報告の１週間後、ハワイの代表的世俗新聞、『パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー』（以下、『アドバタイザー』）はエマソン報告の要約をトップ記事として掲載した[34]。またその２ヶ月後に今度は『フレンド』が『アドバタイザー』に掲載されたエマソン報告の要約を転載する。『フレンド』は転載の理由として、１）そこに明かされる「事実」が「異教徒の知性の傾向や、こうした問題に関する異教徒の思考の特徴、すなわち、そのひどい邪悪さ、忌まわしい堕落、そして根深く残酷な屈従を強力に示してくれる」、２）これらの事実を理解することで、「異教徒の効果的な福音化」には「長期間にわたる膨大な量の労働」が必要であるということが理解できる、３）「異教の諸宗教は大体において良い要素から構成されており、それらを信ずる者たちが神聖なものや霊的なものへ近づくのを助けている、と考える者たちの過ちと戦ううえで役立つ」の三つを

挙げた[35]。ハワイ歴史協会でエマソンによって披露された歴史観と異教に関する知識はこのようにハワイの宗教・世俗新聞を通して一般の人びとのあいだでも広められていった[36]。

『フレンド』はさらに、アレクサンダー報告を掲載した1892年２月号とエマソン報告を掲載した同年６月号のあいだの同年３月号で、ハワイ史に関する興味深い記事を二つ掲載している。一つは、『フレンド』の編集者、セレノ・ビショップ（Sereno Bishop）自身がハワイ歴史協会のために複写した、アルテマス・ビショップ（Artemas Bishop）牧師の日記の抜粋である。この日記はビショップ牧師がハワイ伝道に着任してから３年目、彼が30歳のころに書かれたものであった。記事には、当時、ビショップ牧師は同僚の「エイサ・サーストン（Asa Thurston）」とともにハワイ島のカイルアに駐在していた、とある[37]。

実は、「ビショップ」と「サーストン」の組み合わせは19世紀ハワイ王国史において二度繰り返されている。アルテマス・ビショップはセレノ・ビショップの父であった。またエイサ・サーストンはロリン・サーストン（Lorrin Thurston）の祖父であった。ロリン・サーストンとは、セレノ・ビショップとともにハワイ王国転覆を主導した人物である[38]。つまり、19世紀中葉の父「ビショップ」と祖父「サーストン」がハワイアンのキリスト教化に奔走したように、19世紀末の息子「ビショップ」と孫「サーストン」はハワイ王国転覆のために奔走したのである。息子ビショップがハワイ王国を転覆させる10ヶ月前に父ビショップの日記の抜粋を『フレンド』に掲載した（しかもハワイ王国転覆で彼自身とともに主要な役割を果たした孫サーストンの祖父の名を挙げながら）ということの背後には、過去の代の「偉業」を紹介しつつ、現在の代の企てを正当化しようとする意図がうかがえる。

そうした意図は、息子ビショップが父ビショップの日記の以下の部分を『フレンド』に掲載したという事実のなかにもみることができる。1825年12月16日金曜日、「午前２時にダブルカヌーでコハラに向けて出発。夜明けにマフコナ到着、カヌーを岸に引き上げ、軽食をとり、そのあと徒歩で出発、内陸を横切り、島の反対側へと15マイル歩く。［中略］12時に台地に到着」。同月19日月曜日、「近道をするために、滅多に人の通らない内陸の小道を通って、渓谷を囲む山に登った。［中略］私たちは四つん這いになって、草に捕まりながら、自分の体を引き上げなければならなかった」。上の描写からは、父ビショップがハワイの厳しい自然を物ともせず、キリスト教の伝道に邁進する様子が伝わってくる。それはまるで、これからハワイを政治的に制圧しようとしていた息子ビショップが、父ビショップにより成し遂げられたハワイの自然と宗教の征服の話を持ち出し、誇示しているかのようである[39]。

同月号の『フレンド』に掲載されたハワイ史関連のもう一つの記事は、ハワイ歴史協会の会合で最初の報告をしたアレクサンダーに関するものである。それは、彼がハワイ教育委員会の要請に応えて出版した『ハワイの人びとの略史』（以下、『略

史』）を取り上げ、次のように紹介した。『略史』の著者は同書を「ハワイの学校の高学年および一般向けに書いた」と言っている。著者は事実の扱いにおいて「非常に正確」かつ「公平」であるが、著者自身が認めているように「無宗派（unsectarian）かつ無党派（non-partisan）を目指す歴史といえども完全なものとはなりえない」のも事実で、実際「古代の人びとの状況や外国人との関わりに関する暗黒面についてはその描写の大部分が省かれている」。

『略史』は３部構成（計36章）となっており、第１部では「先史時代」（つまり「歴史以前」）が、第２部では「カメハメハの死まで」が、第３部では「最近の歴史」が扱われている。第１部で扱われている内容は、ハワイの地理・ハワイアンの起源・古代ハワイアンの航海・古代の慣習・法・祭祀・宗教・迷信・儀式・祭典・工芸・娯楽などであるが、これらの点についてはＪ・Ｓ・エマソン（「卑近なハワイの神々」の報告者）の協力を得ている。「信頼できる歴史」を扱う第２部は約600年前からはじまり、1450年ごろから「より明確になる」。1736年のカメハメハ誕生からは「詳細が余すところなく描かれ」、1810年以降については公文書をはじめとする古文書の利用により、「著者は多くの新しい知見を加えることに成功している」。同じことが第３部、「最近の歴史」についても言え、そこでは「偶像崇拝の廃止」および「キリスト教の導入」からリリウオカラニ（在位1891年～1893年）までが扱われ、「176ページ、すなわち同書の半分あまり」が割かれている。記事はこのように紹介した[40]。

上の『フレンド』の記事は、アレクサンダーの『略史』の中心が「最近の歴史」、すなわち「偶像崇拝の廃止」および「キリスト教の導入」以降にあることを強調しており、実際に『略史』のページ配分からすればその通りなのであるが、アレクサンダー自身は同著の序文において、「ハワイアン人種の古代の政治形態および宗教に関する正確な情報の欠如を補うべく格別の注意が払われた」とも言っている[41]。彼自身の言葉からすれば、アレクサンダーはキリスト教の影響を受けた「最近の歴史」と同じぐらい、「偶像崇拝」に満ちた「先史時代」を重視していたということになる。またそのことは、「最近の歴史」の記述に計146頁（『フレンド』には176頁と記載されている）、章の数で言えば15章分を割いているのに対して、「先史時代」のそれにも14章分（計82頁）を割いている――ちなみに第２部の「カメハメハの死まで」には７章分（計71頁）が割かれている――という事実からもうかがえる。ただし、前者には１章あたり9.7頁が配分されているのに対して、後者には同5.9頁しか配分されていない。つまり、後者は前者よりも「分割された」状態で保存されているのである。この「分割」作業においてアレクサンダーは、ハワイ歴史協会で「卑近なハワイの神々」について報告したエマソンの協力を得ていた。つまり、ハワイの「異教」時代の歴史は、この二人によって分割・保存されたのである。

その一方で、アレクサンダー自身が同協会で報告した、「カトリック」国スペインがハワイに与えた影響については、1778年のクック船長（イギリス人）によるハ

ワイ諸島「発見」以降にその大半を割いた第２部のなかに断片的なかたちで埋め込まれた。さらに、キリスト教（カトリックではなく福音主義すなわちプロテスタント）伝播後を扱った最長部分、すなわち第３部に注目すれば、アメリカンボードの宣教師の影響によりハワイの「キリスト教化」・「文明化」がもっとも進んだとされるカメハメハ三世（在位1824年～1856年）の治世に７章分（14章中）があてがわれているのとは対照的に、宣教師の子孫による支配に反旗を翻したカラーカウアの治世――カメハメハ三世の22年に迫る18年の長さがあるにもかかわらず――には１つの章の一部（７頁）しか割かれていないのが印象的である。また後者において、のちのハワイ史に与えた影響からすれば当然触れられるべきであろう、1887年の宣教師の子孫らによるクーデターへの言及がまったくないという点も顕著である。おそらくそれは、最終章をなすこの章の最後に、1875年の米布互恵条約（カラーカウアの治世に締結された）によってもたらされた経済的繁栄にともなう「国の進歩」と「公共の改善」がテーマとしておかれていることとも関係していると考えられる。つまり、アレクサンダーはハワイ史を「進歩」の文脈で語ろうとしていたのであり、そこからは、カラーカウアによる「異教」への「退歩」や、それを力づくで止めようとした宣教師の子孫らの試み（銃剣憲法）は注意深く除外せねばならなかったのであろう[42]。

このようにハワイの「進歩の歴史」はアレクサンダー（とエマソン）によって構成され、『フレンド』によって宣伝され、その後、学校教育を通して広められた。同紙の1892年７月号には早速、アレクサンダーの『略史』が「オアフ・カレッジとフォートストリート学校、および王立学校において教科書として使われている」との記述がみられる[43]。アレクサンダーは『略史』の「結論」部分で、国の繁栄のためには、「勤勉・徳・知性」が大切である一方で、「悪習・不節制・放縦・向こう見ずな党派心」は避けるべきであると説いたうえで、ハワイの若者に次のようなメッセージを贈った。「諸君が成人し、自尊心に満ち、法律を遵守する市民となったとき、また国に忠誠を尽くし、その栄誉を守り、その歴史を誇りに思う市民となったとき、この国は本当の意味で「太平洋の楽園」というその呼び名にふさわしいところとなるかもしれない」、と[44]。アレクサンダーの『略史』と、それが代表する進歩史観はハワイの未来を形成する若者たちのあいだで急速に広まりつつあった[45]。

ちなみに、アレクサンダーは歴史家としての顔のほかに、ハワイ政府の「測量監督」としての顔も持っていた。彼はこの年、合衆国沿岸・測地調査機関（U.S. Coast and Geodetic Survey）のＥ・Ｄ・プレストンが全米科学アカデミーの後援のもと行った、ハワイ島最高峰マウナケアの調査旅行に同行し、そのときの様子を同年９月の『アドバタイザー』紙上で報告している。それによれば、当調査の主な目的の一つはこの山の磁気測量を行うこと、つまり「この山の重さを測ること」であった。一行はコライエハ羊牧場を「この山にアタックするための」作戦基地に定めた

のち、７月19日に登頂を開始した。山頂では６日間、氷点下の夜が続いた。華氏13度（摂氏マイナス10度）まで下がった夜もあったが、「私たちは大丈夫だった」。このようにアレクサンダーの報告には父ビショップの日記と同様、ハワイの厳しい自然を描写したうえで、それを征服する話が散見されるが、それに加えて、ハワイの過去を征服する話もみられる。一行がリリオエと呼ばれるクレーターの頂上を「占拠した」話は、その一つである。アレクサンダーはそこにあった「古代の墓」に言及し、「この地域の先住民たちには、亡き親族の骨を頂上の高原まで運び埋葬する風習があった」と解説してみせる。アレクサンダーは同報告の終わりの部分で、この調査で用いられた「高価で精密な道具」はハワイの過酷な自然にさらされたにもかかわらず「なんの損傷も受けなかった」、「調査目的のすべては達成された」と自負した[46]。このようにアレクサンダーは『アドバタイザー』紙上での報告において、合衆国の科学の力がハワイの自然や歴史を克服していくさまを描いたのである。

この記事から数ヶ月後の翌1893年１月１日、『フレンド』は創刊50周年を祝った。このとき出版された記念号は、同紙が「太平洋岸で現在印刷されている新聞のなかでもっとも古いもの」であり、「本紙の過去50年にわたる記録を読む者たちは、ハワイ諸島の歴史はもちろんのこと、太平洋全体の出来事に関する歴史にも通じることができる」、と同紙の「歴史的価値」を強調した（実際、本稿も同紙の提供する一次史料にその多くを負うている）[47]。

その２週間後の１月17日、宣教師の子孫らが中心となって組織化された公共安全委員会が、ハワイ君主制の象徴であったイオラニ宮殿を占拠し、君主制の廃止と臨時政府の設立を宣言した。流血事態の回避を最優先したリリウオカラニ女王は抗議のもと、同宣言を受け入れた。

『フレンド』２月号は女王に君主制の廃止を言い渡した公共安全委員会の声明文を全掲載するが、同声明には1880年代末以来、宣教師の子孫らによって繰り返されてきた歴史観と同様のものをみることができる。すなわち、ハワイにはかつて立派な立憲君主制が存在したが、カラーカウアのもとで腐敗が進み、絶対主義への志向が高まり、1887年に「人民の反乱」（銃剣憲法）が起きた。その後も王と内閣・議会とのあいだで衝突が続いた。1891年にカラーカウア国王が亡くなったあと、リリウオカラニ女王がその後を継いだが、女王は即位直後に内閣を入れ替えた。1892年の議会では腐敗が進行し、女王は君主の権力を再び強化するために新憲法を発布する権利を主張しはじめた。この段階に至って公共安全委員会が上の声明を発表した。このような歴史観を含む同声明を全掲載した『フレンド』の編集者は、この「素晴らしい１週間」を振り返って次のように述べた。「それは歴史をつくる画期的な出来事であった。かつては高貴で誇りに満ちていたハワイ君主制は名誉を失うとともに突如として崩壊し、ハワイに自由と名誉をもたらす栄光の新時代がはじまった」、と[48]。

1892年１月のハワイ歴史協会設立とともに本格化した、宣教師の子孫らによるハワイ「正史」の記述・出版は、その１年後に起きた君主制転覆の下地を築いた。歴史は彼らのクーデターを正当化するために動員されたのであった。彼らは文字通り「歴史をつくり」つつあった。

第三章　併合運動における歴史家アレクサンダーの役割

1880年代以降、宣教師の子孫たちはハワイの「異教」の過去に対して「知的・霊的戦い」を繰り広げていった。この戦いは1887年の銃剣憲法および1893年の君主制転覆と軌を一にしていた。本稿最後の章となる本章では、この戦いのなかでおそらくもっとも重要な役割を果たしたと考えられる歴史家、すなわちＷ・Ｄ・アレクサンダー博士が1893年のハワイ王国転覆「後」の併合運動において果たした役割を分析してみたい。

1893年７月17日、ハワイ臨時政府はワシントンで併合交渉を進めていた公使のロリン・サーストンの補佐としてアレクサンダーを派遣することを決定した（７月28日に出発）。『フレンド』はその翌月、このことを取り上げた記事のなかで、アレクサンダーが当任務を遂行するにあたって有する資格――「高徳な人格と非常に高い知性、ハワイ諸島の社会・政治史の専門家としての特別な知識」、「標準的ハワイ史の著者」、「教育委員会会長代理」――を強調した[49]。

その約半年後の1894年３月、『フレンド』はアレクサンダーによる「簡約版ハワイ史」を掲載する。「多くの人びとがハワイについて問うている、いまこそ役立つ」として書かれたこの記事は、前章で取り上げたアレクサンダー著『ハワイの人びとの略史』が併合運動のなかで具体的にどのように利用されたかを示している。記事は、アレクサンダーにインタビューしたケイト・フィールドという人物による報告として掲載された。

フィールドがアレクサンダーに最初に尋ねた質問は、イングランド人がハワイを「発見」したときの島民の状態についてであった。この点についてアレクサンダーは次のように答えた。当時のハワイの人びとは「高貴な野蛮人」であった。「世界でもっとも隔絶された場所に住み、長い歳月にわたって人類の他の部分から隔離されてきた」彼らは、「あらゆる点で頽廃しつつあった」。戦争が頻発し、人びとは「堕落し、抑圧され」、政治と宗教は「より独裁的かつ残酷になりつつあった」。フィールドが次に当時のハワイの人口について尋ねると、アレクサンダーは「少なくとも25万人はいたと考えられる」が、「人口増加はすでに止まっており」、「人種としての活力は損なわれていた」と答えた。

続いてフィールドが先住民の統治形態に関して尋ねると、アレクサンダーは次のように答える。カメハメハ一世の統治までハワイ諸島は主に４つの王国からなって

いた。人びとは首長、司祭、平民（農奴）の３階級に分かれていた。首長の地位は「単に政治的なものではなく、神聖かつ宗教的な性格も有していた」。首長は「神々の子孫である」と考えられ､「生前も死後も恐ろしいタブーによって守られていた」。平民には権利が与えられておらず、彼らは自らの労働が生み出した成果の３分の１しか受け取ることができず､残りの３分の２は首長と王のあいだで分配されていた。ここでフィールドは「カニバリズム」の慣行についても尋ねるが、アレクサンダーはその存在は否定した。

フィールドの次の質問はハワイ諸島「発見」後の人口減少の原因についてであった。アレクサンダーは主な理由として､１）外国人によってもたらされた「悪習」（飲酒等）と「病気」（コレラ等）、２）カフナの影響（魔術と薬物の使用による突然の死）、３）アジア人の大量移民（先住民の堕落を加速）の３つを挙げた。

ここでフィールドはハワイの人びとの宗教についても尋ねる。アレクサンダー曰く、それは「陰鬱で恐ろしい」ものであった。陸海空は「邪悪な霊」に満ちており、それらがさまざまな病気を引き起こす、と信じられており、「魔術師」たちはその「邪悪な霊」と交信した。また、「複雑で厳格なタブー制度」（男女の共食の禁止など）が「人びとの日常生活全体を覆っていた」。

フィールドの次の質問は｢最初の宣教師たち｣についてであった。アレクサンダーは次のように説明する。アメリカ人宣教師がハワイに初めて到着したのは1820年３月31日のことであった。実はその１年前にカメハメハ一世が亡くなっており、彼の死とともに、「タブーや偶像崇拝」の制度全体が崩壊していた。宣教師たちに届いた最初の知らせは「リホリホ［カメハメハ一世の息子］が王となった。タブーは廃止され、偶像は焼かれ、神殿は破壊された！」であった。ハワイは「宗教を持たない国という奇妙な光景」を呈していた。つまり、ハワイでは宣教師の到着前にその後のキリスト教の急速な普及の下地が築かれていた。

次にフィールドは宣教師たちの残した成果について問う。アレクサンダーによれば、ハワイアンはもともと「友好的で受容性が高く、知識を渇望し、啓蒙の支配のもとで大きく前進する可能性を秘めた人種」であったが、宣教師たちは彼らのあいだに「素晴らしい変化」をもたらした。彼らの言語を文字に「還元」し、聖書をはじめとする宗教･教育関連の書物をハワイ語に翻訳し、すべての人びとに読み書き･裁縫を教えた。各伝道所は｢文明の拠点かつキリスト教徒としての家庭生活の模範｣であった。第一世代の首長たちの一部は「キリスト教の変革力を強力に示す模範」となった。酩酊や賭博、窃盗や暴力的犯罪はほとんどなくなり、キリスト教式の結婚や家庭生活が定着し、生命と財産は安全となり、初等教育が普及した。キリスト教の「良い影響」により農奴は解放され、選挙権や「私たちの先祖たちがラニミード［マグナカルタが調印された場所］で与えられた権利のすべて」を与えられた。

続いてフィールドが立憲政治の発展と「最近の革命」の原因について尋ねると、

アレクサンダーは次のように答える。アングロサクソン的な立憲政治をハワイのように「多人種から構成される国民」のあいだで実現することは「困難な実験」であったが、それは「非常に有能な人びと」によってはじめられ、最初の30年間は「かなりの成功を収めたようであった」。カメハメハ三世と彼の顧問たちは、国の独立を守るためには「先住民と外国人を一つの共通の組織のもとで統一しなければならない」ことを理解していた。カメハメハ三世とその後を継いだカメハメハ王家の二人の王（カメハメハ四世と五世）は、立憲君主としての自らの立場や、外国人に対してとるべき政策を理解していた。彼らはただ単にハワイアンの王として振る舞うだけでなく、イングランドの王の先例に倣って自らの権力を行使していた。彼らはまた国内の「有能な白人の助言や援助」を積極的に受け入れた。それがなければ「この実験は最初から失敗していただろう」。

ここでアレクサンダーは、カメハメハ五世の時代にはじまった先住民のあいだでの「反動の傾向」に言及する。上ですでにみたように、同時代の宣教師の子孫たちのあいだでは、カメハメハ五世の治世下で「反動の傾向」がはじまり、それがカラーカウアに引き継がれた結果、1887年の銃剣憲法が必要となった、との歴史理解が共有されていた。アレクサンダーも同じ歴史理解にしたがって、カメハメハ五世の時代の「反動」について次のように説明する。これ以降、「以前の良好な人種間の理解が損なわれはじめた」。反動の一因となったのが、アメリカンボードの撤退であった。それは「致命的誤り」であった。これを機に、「先住民の利益のために献身し、彼らからの信頼をえていた無私の白人集団」がいなくなった。また、早すぎる首長階級の絶滅も反動の原因をつくった。先住民の指導層であった彼らの役割を、平民や外国人によって埋めることはできなかった。癩病の流行にともなう隔離政策の実施も人種間の分裂を深めた。ルナリロ（在位1873年～1874年）の治世下で勃発した「無法状態や人種間の憎悪」はその結果である。

次にフィールドはアレクサンダーにカラーカウア治世について「簡単に述べる」よう求める。それに対してアレクサンダーはまず、彼の治世下では「外国企業・資本により生産される国の資源の目覚しい発展」と「外国人の大幅な増加」がみられたと一定の評価を与えたうえで、彼の残した負の遺産について語りはじめる。カラーカウアは「自らをもっぱらハワイアンの首長としてみなす一方で、白人住人は外国の侵入者としてみなしているようだった」。彼の目的はおそらく、「統治形態をアジア的専制政治へと変え」、「白人から政府運営における発言権を奪う」ことにあった。また彼は、「魔術のリバイバル、先住民への酒類販売禁止の撤廃、「国民的」感情の名のもとでの人種的憎悪や嫉妬の扇動」などを通して、「先住民の風儀を乱すための計画的運動」を展開した。彼は任命権を乱用し、「従属的な役人を議会に大量に送り込み」、「余所者（carpet bag）の野心家や裏切り者の白人［それにはカラーカウアのもとで首相を務めた元モルモン教徒のアメリカ人、ギブソンが含まれると考

えられる］を閣僚として雇った」。カラーカウアの「不名誉な（infamous）」行為はついに「1887年の反乱」という結果をもたらし、それには「あらゆる国籍の住民のほぼ全員と、より良い階層の先住民」が参加した。この反乱により、国王は「自らの個人的支配に終止符を打ち白人階層に政治的発言権を与える改正憲法」への署名を迫られた。改正憲法は行政を、議会に対してのみ責任を負う内閣の手に渡し、公務員が議席を持つことを禁じた。カラーカウアに残された３年半の在位期間は、「専制政治復活のためのさまざまな陰謀に満ち溢れていた」。これらの陰謀に彼の妹の「元女王」も関与していたのは周知の事実である。

フィールドの最後の質問は「元女王と最近の革命」についてであった。ここでアレクサンダーの「簡約版ハワイ史」はいよいよクライマックスを迎える。リリウオカラニの即位には「深刻な懸念」が伴っていた。彼女は即位後すぐに1887年憲法の維持を誓ったため、その懸念は一部解消されたものの、彼女は同憲法への署名は「不本意」であったとの声明を発表した。前内閣は前国王とともにその任期を終了したと最高裁が判断したことで、彼女は「新内閣に対して条件を示し、任命権を支配する機会」を得ることとなった。彼女が示した最初の条件は、「彼女お気に入りの悪名高きＣ・Ｂ・ウィルソンに王国の警察全体の支配権」を与えることであった。彼は「評判の悪い人物たちで身辺を固め、悪名高き阿片密売人たちと人目をはばかることなくつきあった」。彼が支配する警察のもとで「阿片窟、賭博場などが暗躍した」。また彼が「他の閣僚の誰よりも行政への影響力を有していた」こともよく知られている。女王は富くじ会社の斡旋人と手を組み、「無知な人びとの支持を取りつけ、借金以外の方法で資金繰りをしようとした」。女王は「白人から投票権を奪う専制的憲法の発表」を目論んでいた。これにより「彼女の計画は完成し、先住民の多数派からの支持を得られるはずであった」。アレクサンダーの「簡約版ハワイ史」の最後は、ウィリス公使が最近発表した公文書――リリウオカラニらに対して批判的な内容を含む――によって「今回の革命は完全に正当化された」と締めくくられた[50]。

『フレンド』に掲載されたアレクサンダーの「簡約版ハワイ史」は、彼がすでに出版していた『略史』のさらなる「簡約版」とでもいえるものであった。それは全体的にみると、アメリカンボードの宣教師到来以前におけるハワイアンの「堕落」、それ以降の彼らの「進歩」と、カメハメハ五世以降の彼らの「反動」という三部構成になっていた。最後の「反動」期は『略史』ではほとんど扱われていない部分である。『略史』はハワイの未来を形成する若者たちの学校教育において用いられる歴史教科書という位置づけであったのに対して、「簡約版ハワイ史」は国内外の一般の人びとに向けて、彼らのいうところの「革命」の正当性を訴える性格のものであった。つまり、前者はハワイ史の「進歩」を強調すると同時に、ハワイの未来から「反動」の記憶を消す必要があったのに対して、後者はハワイ史が辿ってきた「堕

落」「進歩」「反動」の三段階を対比させ、最後の「反動」が宣教師の子孫らによる「革命」を不可避的なものにしたと説明する必要があったと考えられる。

このように『フレンド』はアレクサンダーの「簡約版ハワイ史」を併合運動のために動員したが、前述のとおり、アレクサンダー自身もまたハワイを代表する歴史家として、君主制転覆直後からワシントンＤＣで併合交渉にあたっていた。1894年４月の『フレンド』は、３月24日にアレクサンダーがホノルル港に帰ってきたことを出入港記録の欄で伝え、「アレクサンダー教授の帰国」という見出しの記事を掲載した。記事は「私たちの著名な歴史家兼科学者」の７ヶ月ぶりの帰国を歓迎し、彼が前年８月以降、ハワイ臨時政府の公使として合衆国に派遣され、同国政府とのあいだの「ユニオン」交渉にあたっていたが、「正式な認知は得られなかった」と伝えた。記事はこのように併合交渉の挫折を伝えたうえで、アレクサンダーがこの間果たした役割について次のような見解を述べた。

> アレクサンダー教授はワシントンでの長い滞在中、最近の革命の原因と事実に関して上下院議員に正確かつ的確な情報をかなり精力的に提供･発信していた。上院委員会では主要な証人の一人も務めた。彼の証言が、当人の高貴な人格とその偉大な知識がゆえに説得力を持ったことは言うまでもない。かくしてアレクサンダー教授はハワイ史を記録することだけでなく、それをつくることにも貢献できた（強調は筆者、以下同じ）[51]。

『フレンド』は約１年前に起こった君主制転覆についても「歴史をつくる」事件と評価したが、アレクサンダーのワシントンでの併合交渉に関しても同様の評価を与えた。歴史家アレクサンダーはハワイ史を「記述」するという役割とともに、それを「つくる」役割をハワイの宣教師の子孫らから期待され、彼自身それに応えていた。だが、彼の併合交渉は失敗に終わった。その背景には、当時の民主党クリーブランド政権（1893年～1897年）がハワイ併合に消極的で、むしろリリウオカラニの復位を支持していた、という当時の合衆国の政治事情がある。また同国の世論もさまざまな理由から――ハワイ産砂糖の国内市場への流入を恐れる国内の砂糖業者からの反対や、白人以外の雑多な人種からなるハワイを合衆国の一部として迎え入れることへの抵抗など――決して併合に積極的ではなかった。

だがそうした合衆国の情勢はやがて変化の時を迎える。1896年11月３日に行われた合衆国大統領選挙で、ハワイ併合を支持するとみられていた共和党のマッキンレーが大統領に選ばれたのである。それとほぼ同時にアレクサンダーの『ハワイ君主制末期の歴史および1893年革命』（以下、『末期の歴史』）が出版された。彼は同書の序論で出版に至った経緯について次のように述べた。「1887年革命やそれに至るまでの出来事に関する簡潔で明確かつ冷静な説明が求められてきた。時の経過とともに、党派精神の苦々しさは和らぎ、論争当事者双方に関して以前よりも正しい評価ができるようになった」。彼のこうした言葉からは、彼が時代の変化を楽観し

はじめていたことがうかがえる。彼は同書の出版の経緯についてさらに続ける。アレクサンダーは最初、J・H・ブラウントの要請に応えて「1887年の政治的大事件についての素描」を書き、それがのちに『ハワイアン・ガゼット』紙によって再版された。同紙の要請により、さらに彼は「不承不承」、カラーカウア時代、リリウオカラニ時代、1893年「革命」の「素描」と、「革命」およびその後の出来事についての「より詳しい説明」を書いた。この本の後半部分の記述にあたってはS・E・ビショップ（『フレンド』編集者）の論説を参照した、と[52]。

上のアレクサンダーの説明は次の３つの点で興味深い。まずは、アレクサンダーがハワイ史の記述の「簡略化」に固執していたことが顕著である。1898年の『末期の歴史』における「簡潔で（brief）明快かつ冷静な説明」を、1891年の『略（Brief）史』、1894年の「簡約版（condensed）」と並べてみると、彼の「簡略化」へのこだわりが浮かび上がってくる。それはまるで彼がハワイ史を「簡略化」して、征服しようとしていたかのようである。第二に、『末期の歴史』出版の発端が、1893年「革命」に批判的な態度をとった合衆国公使ブラウントに対する説明の必要性にあった、ということがわかる。つまり、同書は1893年「革命」と、それに先行した1887年「革命」の「弁明」とでも言える性格を持っていたのである。第三に、この時期のハワイにおける歴史記述が当地の代表的な、歴史家（アレクサンダー）と世俗新聞（『ハワイアン・ガゼット』）と宗教新聞（『フレンド』）の協働のうちに推進されていたという事実が示されている。まさにハワイの歴史はこれらの人びと（歴史家と編集者）によって「つくられ」つつあった。

アレクサンダーは序論の最後に自らの歴史記述の客観性を主張する。「筆者は中立を装うつもりはないが、「情状を酌量したり、悪意をもってなにかを記述したりすることなく」、可能な限り諸事実を、相互の関係や均衡を正しく捉えつつ、あるがまま記述するよう真摯に務めた」、と。序論最後でのアレクサンダーのこうした言葉を、その直後におかれた第１章冒頭の以下のような記述に照らし合わせてみると、彼の言う「諸事実をあるがままに記述する」という行為が決して価値判断から完全に自由であったわけではないことが明らかとなる。

> カラーカウアの治世にともなう諸悪の多くがカメハメハ五世の治世にその起源をもつかもしれないというのは本当である。同君主の反動的政策はよく知られている。彼のもとで異教の「再発」がはじまった。そのことは、1866年６月彼の妹のヴィクトリア・カママルとやらが亡くなった際の葬儀での異教徒の乱痴気騒ぎや、淫らなフラフラの踊り子や邪悪なカフナ（魔術師連中）に対する彼の後ろ盾からも明らかである。そしてこの反動と密接な関係にあったのが、外国人に対する嫉妬や憎悪の高まりであった[53]。

実はこのような歴史記述における「客観性」の問題は、ハワイ福音派を代表する歴史家アレクサンダーに限られたことではなく、同時代の合衆国の歴史家たちのあ

いだにも広くみられたものであった。ピーター・ノビックによれば、19世紀末の合衆国に現れた新しい種類の「科学的」歴史家たちは、「科学」（ダーウィンの進化論やそれにもとづく社会進化論がその象徴）のお墨付きを得た「人種差別主義」のもと、奴隷制や南北戦争、そして再建に関する歴史的評価において南北の見解の「和解」を図ることで、「客観性（objectivity）」または「公平性（impartiality）」を獲得した。この「和解」は、北部人の見解が南部人のそれに近づくというかたちをとった。また、合衆国の帝国主義的膨張も、北部人を世界の諸人種の「政治的能力の違い」に直面させることで、この過程を後押しした[54]。宗教・政治的に合衆国北部の伝統の継承者であったハワイの福音派[55]の一人、歴史家アレクサンダーにおいても、それと同様の「客観性」の装いのもとでの人種差別主義がみられたとしても不思議ではない。

『末期の歴史』は出版されるや否やハワイの世俗新聞で連日のようにその広告が掲載された[56]。その一方で、筆者が確認した限り、合衆国の新聞にはアレクサンダーの新著が扱われた形跡はみられない。そして1897年１月、合衆国では併合推進派のマッキンレーが大統領に就任し、それ以降、同国では併合の機運が次第に高まっていく。同年６月にマッキンレーはハワイを「日本の脅威」――日本政府がハワイに大量の移民を送り込むことでハワイを乗っ取ろうとしているとされた――から守るためとしてハワイ併合条約に調印し、批准のため上院に送った。上院では反併合派の抵抗にあうが、翌1898年４月の米西戦争の勃発によりハワイの地政学的価値が高まるなか、同年７月７日、合衆国議会は条約の批准によってではなく、両院合同決議によってついにハワイ併合を承認することとなった[57]。併合の最終段階においてアレクサンダーの新著が及ぼした具体的な影響を特定することはできないが、状況の変化により併合がいざ現実化しようとした際に、彼の著は少なくとも米布の併合論者のあいだでは、併合を正当化する役割を果たしたと言ってよいだろう。

おわりに

1880年代末から1890年代初めのハワイ王国末期において、それまで同国の「キリスト教化」・「文明化」を主導してきたアメリカ人宣教師の子孫らは、同国の歴史を「書き」ながら「つくる」という二つの行為を同時に進めていった。彼らのこうした行為を導いたのは、彼らが米福音派から継承した後千年王国説的終末論に根ざす世界観・歴史観であった。

ハワイ福音派の彼らは1880年代半ば以降、ハワイアンの伝統文化のリバイバルを積極的に推進するカラーカウア国王とのあいだで歴史記述をめぐる論争を繰り広げた。彼らは後千年王国説的楽観論にもとづき、1860年代以降のハワイアンのあいだでの「異教」のリバイバルを、より長期的な「キリスト教」の「進歩」の文脈にお

ける「一時的な退歩」として相対化することで、ハワイ王国における自らの宗教・政治的支配の強化を図った。その一方で、カラーカウアはハワイアンの伝統的宇宙論そのものを構成していた首長の系図にもとづくハワイアンの伝統的歴史観を収集し、ハワイアンのあいだに広めることで、宣教師派の支配に対する彼らの抵抗運動を鼓舞した。

このようなハワイアンの伝統文化のリバイバルに危機感を覚えた宣教師派は、1887年に入るとハワイ福音派教会の統廃合やアメリカンボード宣教師「補強部隊」のハワイ到着50周年記念行事の挙行などにより自らの陣営の強化を図る一方で、「革命」を計画・実行し、カラーカウアに銃剣憲法を強要した。

その後も宣教師の子孫とハワイアンの宗教・政治的闘争は続いた。1892年１月のハワイ歴史協会設立はこのような流れのなかで起こった出来事であった。ハワイ歴史協会設立当時の会合では、宣教師の息子であったW・D・アレクサンダーとJ・S・エマソンが、ハワイにおけるスペインのカトリック文明の影響とハワイ土着の「異教」の影響をそれぞれ分析し、同国の「過去」のなかの「適切な」位置に収め、無力化しようとした。二人の報告の内容はすぐさまハワイの新聞で紹介され、一般の人びとのあいだに広められた。

その一方で、アレクサンダーは同年出版した『ハワイの人びとの略史』のなかで、ハワイが「異教」の過去から脱し、キリスト教化（福音主義化）されていく「進歩」の物語を描いた。この歴史書はハワイ歴史協会でのアレクサンダーとエマソンの報告と同様、ハワイの新聞によって紹介されたほか、その後のハワイの学校教育の現場で教科書として採用されることで、ハワイの未来を担う若者たちの歴史観を形成していった。

ハワイ歴史協会設立を契機に本格化した宣教師の子孫らによるハワイ「正史」の記述・出版は、その後の君主制転覆やハワイ併合の下地を築いた。彼らの書いた歴史は、ハワイの人びとを過去の「霊的・知的捕囚」、すなわち「ローマカトリック教」の信仰や「異教」から救い出すために動員され、彼らが切り開こうとしていた「福音主義的未来」を正当化した。彼らは文字通り「歴史をつくり」つつあった。

1893年の宣教師派によるハワイ王国の転覆後、アレクサンダーはワシントンに赴き、合衆国の上下院議員に対して、ハワイで最近起きた「革命」の諸「事実」について証言し、合衆国がハワイを併合する必要性を訴えた。だが、彼の併合交渉は合衆国内のさまざまな方面からの反対を前に挫折を余儀なくされた。合衆国で併合論が勢いづくのは、1896年の大統領選挙で併合支持の姿勢を打ち出していた共和党のマッキンレーが大統領に選ばれたあとのことであった。この年の大統領選挙とほぼ同時に出版されたアレクサンダー著『末期の歴史』は、1887年と1893年の「革命」の正当性を主張する内容のものであった。同著は、ハワイの新聞で発売開始とともに連日のように宣伝され、ハワイでの併合論の高揚に寄与した。

1898年、ハワイはついに合衆国に併合された。そこに至る過程において歴史や歴史家は併合の正当性を証明するために動員された。とはいえ、それは併合を正当化するための議論を提供しただけで、結局のところ、実際に併合が実現するためには歴史の潮流の変化、すなわち合衆国における政権交代や国際情勢の変化が必要であった。

この稿を締めくくるにあたって、最後に付け加えたいことがある。「歴史」はハワイ併合を一挙に推し進める一方で、ハワイ福音派の世界観そのものをも揺るがしつつあった。1890年代後半の『フレンド』ではしばしば「高等批評（Higher Criticism）」が取り上げられた。高等批評は聖書を他の文書と同様の「歴史的所産」ととらえ、それがいつ誰によって書かれたのかを特定しようとした。つまり、それは聖書の「霊感説（inspiration）」――聖書の著者は神から直接、霊感を受けて書いたとされた――だけでなく、その「歴史的真実性（historical veracity）」にも挑戦を突きつけるものであった[58]。ハワイ福音派が神の言葉と信じていた彼らの聖書は、高等批評によって、当時彼らが書いていたハワイ史と同様、それが歴史上の誰かによって「つくられた」ものである、との評価を下されつつあった。彼らは「歴史」をつくると同時に、「歴史」が彼らをとらえようとしていた。

註

(1) Belle M. Brain, *The Transformation of Hawaii: How American Missionaries Gave a Christian Nation to the World* (New York: Fleming H. Revell, 1898), 9, 17; ブレインによるこのような歴史の「歪曲」を取り上げ批判したのが、コフマンである。Tom Coffman, *Nation Within: The History of American Occupation of Hawai'i* (1998; repr., Koa Books: Kihei, HI, 2009), xiii, xvi.

(2) Noenoe K. Silva, *Aloha Betrayed: Native Hawaiian Resistance to American Colonialism*（Durham & London: Duke University Press, 2004）, 1-4.

(3) Lilikalā Kame'eleihiwa, *Native Land and Foreign Desires: Pehea Lā E Pono Ai? How Shall We Live in Harmony?*（Honolulu: Bishop Museum Press, 1992）; Haunani-Kay Trask, *From a Native Daughter: Colonialism and Sovereignty in Hawai'i* (1993; repr., Honolulu: University of Hawaii Press, 1999), 114（ハウナニ＝ケイ・トラスク（松原好次訳）『大地にしがみつけ――ハワイ先住民女性の訴え』春風社、2002年、16頁）; ハワイ史の新しい理解に貢献したハワイアンの男性の歴史家としてはオソリオを挙げることができる。Jon Kamakawiwo'ole Osorio, *Dismembering Lāhui: A History of the Hawaiian Nation to 1887* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2002).

(4) コフマンは、米布のアメリカ人の「二重の陰謀」によってハワイが占領されていく

過程を克明に描き出した。Coffman, *Nation Within*; 目黒志帆美は、白人の支配とハワイアンの抵抗という二項対立的な枠組みを超えて、ハワイの国王の有していた支配者としての機能に注目し、それがフラによっていかに正当化されたかという問題を扱っている。目黒志帆美『フラのハワイ王国史――王権と先住民文化の比較検証を通じた19世紀ハワイ史像』御茶の水書房、2020年。

(5) Donald D. Johnson, "Notes on the History of the Hawaiian Historical Society: A Centennial Year Observation," *Hawaiian Journal of History* 26 (1992).

(6) 山本貴裕「1887年革命前後のハワイ福音派による宗教・政治的運動」『中・四国アメリカ研究』８、2017年。

(7) "Idolatry among Hawaiians," *Friend*, July 1888; 以下で参照する『フレンド』の記事は Hawaii Mission Houses 所蔵のデジタル・コレクション https://hmha.missionhouses.org/collections/show/8 から取り出したものである。

(8) Ernest Lee Tuveson, *Redeemer Nation: The Idea of America's Millennial Role* (1968; reprt., Chicago: University of Chicago Press, 1980), 33-34.

(9) "Abstracts from the Annual Report of the Hawaiian Board," *Friend*, July 1886.

(10) "Christian Unity: A Sermon in Behalf of Foreign Missions, preached in Fort-St. Church June 6, 1886, by appointment of the Hawaiian Board, and published by vote of that body," Ibid.

(11) "Retrospect and Outlook," *Friend*, Jan. 1890.

(12) "The July Meetings," *Friend*, June 1891.

(13) Kameʻeleihiwa, *Native Land and Foreign Desires*, 19.

(14) Silva, *Aloha Betrayed*, 97-104.

(15) Ibid., 104-120.

(16) "The Reinforcement of 1837," *Friend*, May 1887.

(17) 山本「1887年革命前後のハワイ福音派による宗教・政治的運動」、51-57頁。

(18) Ibid., 61-65.

(19) Johnson, "Notes," 1.

(20) Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1778-1854, Foundation and Transformation* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1938), 341.

(21) Johnson, "Notes," 1-4.

(22) W. D. Alexander, "The Relations Between the Hawaiian Islands and Spanish America in Early Times," in *Papers of the Hawaiian Historical Society* 1 (Honolulu: Hawaiian Historical Society, 1892), http://hdl.handle.net/10524/962.

(23) "The Relations Between the Hawaiian Islands and Spanish America in Early Times," *Friend*, Feb. 1892.

(24) Alexander, "The Relations," 1-2.

(25) Ibid., 2–6.

(26) Ibid., 8–10.

(27) この報告はもともと1889年３月25日に開催されたホノルル社会科学協会の会合で読まれたものである。J. S. Emerson, “The Lesser Hawaiian Gods,” in *Papers of the Hawaiian Historical Society* 2 (Honolulu: Hawaiian Historical Society, 1892), 1, 24, http://hdl.handle.net/10524/96.

(28) Ibid., 1–2.

(29) Ibid., 2–5.

(30) Ibid., 5–6.

(31) エマソンは24頁からなる報告のなかで17頁を割いて多様なアウマクアを記述している。それには、トカゲの神「キハ・ワヒネ」、ハワイ島の火山の女神「ペレ」、ペレの妹の「ヒイアカ」、黒魔術に用いられる「不浄」な悪魔「カポ」、人間にとってもっとも役に立つ神「プエオ」（フクロウ）、それを祀る人びとの友であり守護霊であるとされるサメの神々、漁を助ける「レホ」（子安貝）や「オピヒ」（カサガイ）、不吉なしるしの「エヌヘ」（蠕虫）、魚の神々、鳥の神々、豚・犬・ネズミの神、木・植物の神々、水の神、石の神、人間の排せつ物の神「ヌウ」、雲の神、太陽の神、星の神々、高い階級の首長の崇拝する四大神「クー、カネ、カナロア、ロノ」、カパなめし職人の守護神「ヒナ」、鳥を狩る者の神、カヌー職人の神、漁師の神、「卑猥な」フラの女神「ラカ」、骨折りとボクシングの神「カライパホア」、人を呪って殺す神「ウリ」、人間のかたちの悪魔「クアム」が含まれている。Ibid., 5–23.

(32) Ibid., 9.

(33) Ibid., 23–24.

(34) “Hawaiian Historical Society,” *Pacific Commercial Advertiser*, April 14, 1892, https://chroniclingamerica.loc.gov/lccn/sn85047084/1892-04-14/ed-1/seq-1/.

(35) “The Lesser Hawaiian Gods,” *Friend*, June 1892; 転載の理由の説明は “Disaster to the Hawaiian Historical Society Library,” Ibid. にみられる。

(36) 矢口祐人はＪ・Ｓ・エマソンの兄でフラの研究者でもあったナサニエル・エマソンに関して、「彼は最新の科学知識を学んだ医者として、ハワイイの急速な西洋化・近代化を支持し、その一端を担いながら、同時に古い時代のハワイイを文書にして保存しようとした」と述べたが、それと同じことが弟のＪ・Ｓ・エマソンについても言える。矢口祐人「ナサニエル・エマソンのフラ――エスノグラフィック・アーカイヴスをめぐって――」瀧田佳子『太平洋世界の文化とアメリカ――多文化主義・土着・ジェンダー』彩流社、2005年、103頁。

(37) “Journal Kept at Kairua, Hawaii,” *Friend*, March 1892.

(38) ハワイ王国最後の君主となったリリウオカラニは、自伝のなかでハワイ王国乗っ取りの主犯格として息子ビショップと息子サーストンの二人を名指しで非難してい

る。Liliuokalani (Queen of Hawaii), *Hawaii's Story by Hawaii's Queen* (1898; repr., Memphis: General Books LLC, 2012), 76.

(39) 息子ビショップは『フレンド』で時折ハワイの自然の征服ともとれる見解を示している。たとえば1888年11月号には、「モアナルアの邪悪な坂の傾斜が緩められた」、「カラウアオやワイマルの馬鹿げたほどひどい坂もまもなくなくなるだろう」、「町からたった７～８マイルしか離れていないところにある主要道路にこのような勾配が残っているのは嘆かわしいことである。40年ものあいだ私たちはこの不満を抱いてきたが、サーストンという人物が私たちを解放してくれるだろうか」などの見解がみられる。"Outing from the City," *Friend*, Nov. 1888.

(40) "*A Brief History of the Hawaiian People* by W. D. Alexander," *Friend*, March 1892.

(41) D. W. Alexander, *A Brief History of the Hawaiian People* (New York: American Publishing Company, 1891), iii.

(42) 第１部には「異教」関係の章として「崇拝の対象」「偶像と神殿」「儀式の制度」「神殿の奉納とマカヒキ祭」「私的崇拝」「魔術と占い」「葬式と未来の魂の状態についての教え」の７つがおかれている。第２部でのスペインの影響への言及は、第15章「古代史」の一部（「スペイン人によるハワイ諸島の発見」）、第21章「カメハメハ一世の治世の最後、1810年から1819年にかけて」の一部（「スペインの海賊」）」などにみられる。第３部の最終章では、約１年の在位期間しかなかったカラーカウアの前任者（ルナリロ）と後任者（リリウオカラニ）の時代にそれぞれ３頁、カラーカウアの時代に７頁、「国の進歩」に２頁、「公共の改善」に２頁、「結論」に２頁が充てられている。

(43) "Untitled," *Friend*, July 1892.

(44) Alexander, *A Brief History*, 311-312.

(45) 1913年にアレクサンダーが亡くなった際、地元新聞の一つにジェームズ・ケオラという名の読者が投稿し、アレクサンダーの死を悼んでいる。そのなかでこの読者は、アレクサンダーの『ハワイとその人びとの歴史』（おそらく『略史』をさす）に言及し、この書は「ほとんどすべての人が知っている」とし、「ハワイアンは彼の想い出を永遠に尊ぶであろう」などと述べている。"Prof. W. D. Alexander," *Honolulu Star-Bulletin*, March 5, 1913, https://chroniclingamerica.loc.gov/lccn/sn82014682/1913- 07-22/ed-1/seq-12/.

(46) "Ascent of Mauna Kea, Hawaii," *Pacific Commercial Advertiser*, Sep.14, 1892, https://chroniclingamerica.loc.gov/lccn/sn85047084/1892-09-14/ed-1/seq-1/; 同記事によれば、プレストンは1887年（銃剣憲法の年）にはマウイ島のハレアカラで同様の調査を行っている。

(47) "The Jubilee Year of 'The Friend,'" *Friend*, Jan. 1893.

(48) "A Wonderful Week," *Friend*, Feb. 1893.

(49) "Hawaiian Commissioner Alexander," *Friend*, Aug. 1893.

(50) "Hawaiian History Condensed," *Friend*, March 1894; 前月号の『フレンド』によれば、これらの公文書のなかでウィリスはリリウオカラニの見解を「極端」とし、彼女が復位した場合、その助言者となるであろう王党派の顔ぶれについても「良き政府やアメリカの利益の友人にとっては思わしくない」と述べた。"'Extreme' views of Liliuokalani", *Friend*, Feb. 1894; "Minister Willis' Opinion of the Ex-Queen's Partisans", Ibid; 実のところ、ウィリスはクリーブランド大統領からリリウオカラニ女王復位のための交渉役を任じられていた。Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom, 1874-1893, The Kalakaua Dynasty* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1967), 605.

(51) "Marine Journal," *Friend*, Apr. 1894; "Return of Prof. Alexander," Ibid.

(52) W. D. Alexander, *The History of Later Years of the Hawaiian Monarchy and the Revolution of 1893* (Honolulu: Hawaiian Gazette, 1896), Preface.

(53) Ibid., Preface, 1.

(54) Peter Novick, *That Noble Dream: The "Objective Question" and the American Historical Profession* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), 72-80.

(55) 彼らの先駆者たちは「ニューイングランド」の会衆派を中心に設立された福音主義的自発結社、すなわちアメリカンボードから派遣された宣教師であった。米西戦争のさなか（併合直前でもあった）ハワイ福音派の新聞『フレンド』は南北戦争のとき北軍（ニューイングランド人はその重要な部分を構成した）を鼓舞した「共和国戦闘賛歌」を一面冒頭に掲載している。"Battle Hymn of the Republic," *Friend*, June 1898.

(56) *Hawaiian Gazette*, Nov. 3, Nov. 6, 1896; *Pacific Commercial Advertiser*, Nov. 4, Nov. 5, Nov. 6, Nov. 7, Nov. 10, Nov. 18, Nov. 19, Nov. 20, Nov. 21, Nov. 23, Dec. 2, Dec. 22, Dec. 23, 1896.

(57) William M. Morgan, "The Anti-Japanese Origins of Hawaiian Annexation Treaty of 1897," *Diplomatic History* 6-1 (Winter, 1982): 22-44.

(58) たとえば1897年４月の『フレンド』では、旧約聖書を構成する文書の一つ「ヨナ書」は「事実の物語」ではなく、「想像の産物」であるとする説が取り上げられ、次のように批判された。この説によれば、ヨナ書は、神の救いはイスラエルのみに与えられ「異邦人（Gentiles)」には与えられないとする「ユダヤ人の誤りを非難・風刺するために」書かれたとされるが、イエス自身が、ヨナの説教によりニネベ人（異邦人）が悔い改めたという例を用いて、カペルナウム（イエス・キリストのガリラヤ地方での伝道の本拠地）の改悛の情のない人びとを非難したこと、またイエス自身が、自らが埋葬された３日間（昇天まで）を、ヨナがクジラの腹のなかで過ごし

た３日間と比べていることからして、ヨナ書は実際に神に「霊感」を授けられた著者によって書かれ（ゆえに「無謬」）、かつ「歴史的真実性」を有しているといえる、と記事は反論した。これは、イエス自身の権威によって聖書の「無謬性」と「歴史的真実性」を担保しようとする見解である。“Is the Book of Jonah Historical?” *Friend*, Apr. 1897; この記事の直後には高等批評家の「非科学性」を批判する記事もみられる。“Higher Critics Unscientific,” Ibid; そのほかにもこの時期の『フレンド』に掲載された高等批評関連の記事としては以下のようなものが挙げられる。“A Deadly Blow at ‘Higher Critics,’” *Friend*, Nov. 1896; “Glory of the Advent,” *Friend*, Jan. 1897; “Character of Jesus Unique,” Ibid.; “The Atoning Cross,” Ibid.; “The New Testament Self-Verifying,” Ibid.

（広島経済大学）